

平成 28 年 7 月 1 日  
地震調査研究推進本部  
地震調査委員会

## 日南湖断層の長期評価

### 1. 断層の位置・形態

日南湖（にちなんこ）断層は、鳥取県日野郡日南町印賀から日南町花口にかけて分布する活断層である（図1）。長さは約13kmで、概ね北西-南東方向に延びる。日南湖断層は横ずれを主体とする断層である。

### 2. 断層面の地下形状

日南湖断層の断層面の長さは、不明である（表1）。断層面の傾斜はほぼ鉛直と推定される。断層面の幅は不明であるが、地震発生層の下限を目安とすると15-20km程度の可能性がある。

### 3. 過去の断層活動

日南湖断層の平均的な横ずれの速度は不明である。日南湖断層の最新活動時期は約9万年前以降、約2万8千年前以前であった可能性がある。

活動間隔、平均的なずれの速度は、不明である。

### 4. 活動時の地震規模

日南湖断層は、全体が1つの区間として活動する場合、マグニチュード6.7程度の地震が発生する可能性があり、その際には断層近傍の地表に1m程度の横ずれが生じる可能性がある。

### 5. 地震後経過率（注1）

日南湖断層では、過去の活動が不明であるため、地震後経過率や地震発生確率を算出することはできない。

### 6. 今後に向けて

日南湖断層については、過去の活動や平均的なずれの量が不明なため、地震後経過率や地震発生確率が算出できていない。また、1回のずれの量は経験的に求められたものであり、地下の断層長さについても不明である。今後、過去の活動や平均的なずれの速度、1回のずれの量、地下の断層長さを明らかにする必要がある。

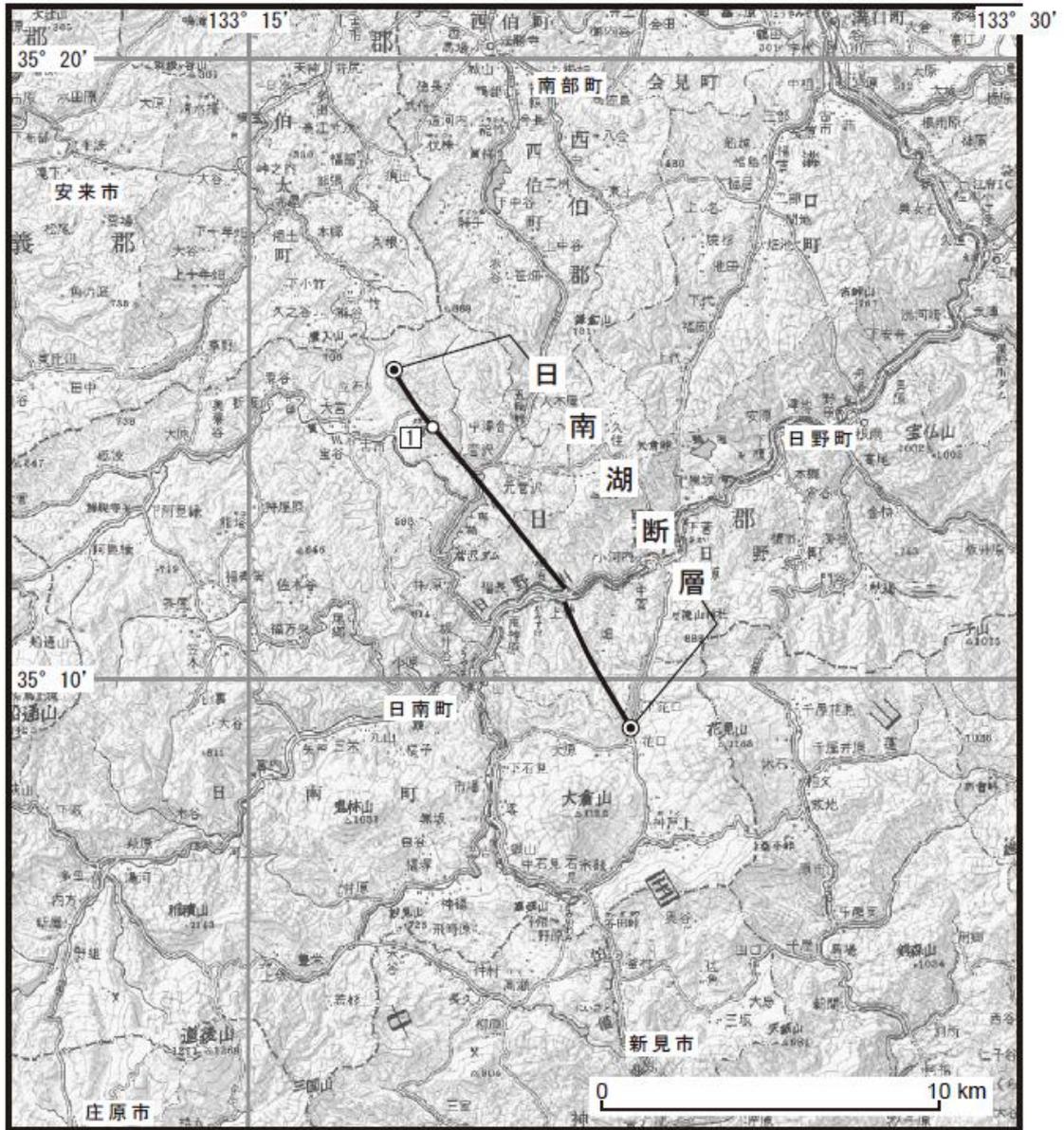


図1 日南湖断層の位置

● : 断層の端点    ○ : トレンチ調査等の調査地点    1 : 呼子西方地点  
 基図は国土地理院発行数値地図 20000 「高梁」

表 1 日南湖断層の特性

項目	特性	信頼度 (注2)	根拠 (注3)
1. 断層の位置・形態			
(1) 構成する断層	日南湖断層		文献1、2による。
(2) 断層の位置・形状	断層の位置 (北端) 北緯35° 15.2' 東経133° 17.7' (南端) 北緯35° 09.5' 東経133° 22.3'  長さ 約13km 一般走向 N33° W	○  ○  ○  ○	文献1、2による。   文献1、2による。 一般走向は断層帯の両端を結んだ方向。
(3) ずれの向きと種類	横ずれ断層	○	文献2の記述などから推定。
2. 断層面の地下形状			
(1) 断層面の傾斜	ほぼ鉛直	○	文献3の記述などから推定。
(2) 断層面の幅	上端の深さ 約0km  下端の深さ 不明  断層面の幅 不明	◎  —  —	D90による地震発生層の下限深さは15-20km程度。
(3) 断層面の長さ	不明	—	
3. 断層の過去の活動			
(1) 平均的なずれの速度	不明	—	
(2) 過去の活動時期	活動1(最新活動): 約9万年以降、 約2万8千年以前	△	文献3の記述などから推定。
(3) 1回のずれの量	1m程度(横ずれ成分)	▲	断層の長さか

			ら推定。
(4) 平均活動間隔	不明	—	
(5) 過去の活動区間	断層全体で1区間	○	断層帯の位置関係・形態等から推定。
4. 活動時の地震規模			
(1) 活動時の地震規模 (注4)	マグニチュード6.7程度	▲	断層の長さから推定。
5. 地震後経過率			
地震後経過率(注1)	不明	—	

注1：最新活動（地震発生）時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。

注2：信頼度は、特性欄に記載されたデータの相対的な信頼性を表すもので、記号の意味は次のとおり。

◎：高い、○：中程度、△：低い、▲：かなり低い

注3：参考文献

文献1：活断層研究会編（1991）：「新編日本の活断層—分布図と資料」。東京大学出版会，437p.

文献2：200万分の1活断層図編纂ワーキンググループ（2000）：「200万分の1日本列島活断層図」—過去数十万年間の断層活動の特徴—，活断層研究，19，3-12.

文献3：杉山雄一・宮下由香里・伏島祐一郎・小林健太・家村克敏・宮脇明子・新谷加代（2004）：活断層・古地震研究報告，4，193-207.

注4：経験式によれば、活動時の地震規模M（マグニチュード）は、断層の長さL（km）を用いて、 $M = (\log L + 2.9) / 0.6$ と表される。

ただし、長さ20km未満の活断層には適応できない可能性があるため、ここでは信頼度を▲とした。